

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	All My Sons論 <一般>
Author(s)	田村, 正夫
Citation	広大言語 , 11 : 39 - 40
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046377
Right	
Relation	



間どもにその枝を切られ、その幹にはコモをまかれ、それがまた一つの自然なのだという顔をした街路樹が目に入る。もがれたり、つけられたり、面白いと思えば面白い。何かに似ていると思ってしばらく眺めていると、最後に「断絶」ということばが飛び込んで来た。

秋祭り

シャンソン聞きつ

辞書を引き

All My Sons 論

田 村 正 夫

「私」にとって社会とは何か、これは人間が集まり、組織形態を組むところどこにおいても未解決の問題であり、文学作品においても主要なテーマとなっている。それは「私」という私的状況と「社会」という公的状況、いいかえれば、個的レベルの問題と全体的レベルの問題の相克である。

いまぼくは、現代アメリカの劇作家 Arthur Miller の作品 Incident at Vichy を読み終え、次に All My Sons を読んでいる。Arthur Miller は以前、今は亡き Marilyn Monroe と結婚したことがあり、その方面から探っていけば、あるいは彼のおもしろい人間像が浮^く上がるかもしれない。しかし、その方面の知識に乏しいぼくは、やはり彼の作品を中心に据^かえて、そのなかで彼が追求した「私」にとっての「社会」とは何か、を考えていくよりしようがないようである。

戦争成金である工場主 Joe Keller が破滅していく過程は、ギリシア古典悲劇のそれに似ている。ソポクレスは、その作「オイディプス王」において、劇中の出来事の構成を「真相の発見」と、それによる劇中人物の「運命の逆転」に緊密化させた。その作劇手法は、All My Sons において、息子 Larry の死因が父 Keller の狂気じみた軍需品製造と関係があるとわかったとき（真相の発見）の Keller の運命の逆転となっている。この手法は観客を劇中人物とともに、悲劇の頂点へ引き上げる効果を持つ。そうして、Keller は、オイディプスと同じく、登りつめた頂点から一気に破滅の道を転がり落ちる。

Keller の死が哀しい詩であつたとしても、それは、彼の置かれている状況からの可能な限りの抗議の死である。「オイディプス王」の場合、人間が運命という見えない糸に操られ、ついには自虐に赴くの^に比して、Keller の死は、彼が切開いていった人生の終局であり、あくまで人為的な悲劇の終末とみたい。ここに、ぼくは、人間の可能性が古代以来発展してきたその^からをみる。つまり、個人にとって、古代ギリシアにおいては運命が絶対的、支配的であつたの^に対し、現代においては人為的な社会という虚構が問題なのである。絶対的な運命の超人為性は、科学的、合理的精神の発展によって人間の可能性の^かのなかへ組み入れられたのである。従って、オイディプ

ス王の死は、どうしようもない死であり、Kellerのそれは、人為的に組織された社会機構によるものであるとともに、そのような社会に対する抗議の憤死なのである。

Joe Kellerは家族の幸福を願って働き、努力してきた、いわばあたりまえの男なのである。平凡な家庭の主人なのである。その彼が自殺に追いやらなければならなかったことに、息子Larryの死という偶然性はあるにせよ、現代人の存在の不安をみる。白でも黒でもない人間が自殺に追い込まれる状況は恐しい。そして、そのような状況に追い込まれる可能性は、ほくたちひとりひとりが持っている。空中墜落のようにはなく解体する人間の存在は、追いかける幻想をはらみつつ、絶えず追いかけられるような不安を宿している。にもかかわらず、「私はまだまだ大丈夫さ」という安全意識が存在の支えになっている。それが、自分を除いたところの「社会」という規定をでっちあげ、社会という公的状況に無関心、無責任でいられる根拠となっている。「私」にとって社会とは何なのか、それは「私」の責任を覆い隠す隠れみのか。

社会の「実体」を問いただすと、それは明らかに個人でしかない。そうそれは「あなた」なのであり、「私」なのだ。Incident at Vichyの最後の場面で、ユダヤ人Leducに自分のpass（通行証）を手渡しナチの手から逃がせ、自分はナチの少佐と向合ったVon Berg。彼の、いま起こりつつあることに対する責任感のある態度、それは社会における自己の位置を実感した者の姿である。Joe Kellerは社会における自己の位置を、息子Larryの死因によって実感する。Kellerは自分が発送させた欠陥部品によって戦闘機が空中分解し、21人の操縦士が死に至ったことには、しらをきっても、それが我が子Larryの死にも及んだとき、のがれ得ない自分の位置と罪を実感する。“All My Sons!”と叫んで彼は自殺する。このことばは、彼が自らの内に「社会」を飲み込んだことを示している。

Joe Kellerの死は、社会に対する無関心、無責任への、彼自身の罰ということであるとともに、それはなおかつ無責任でいられる者への警告でもある。現代社会の虚構による犠牲者の哀しい憤死である。また病的なまでに息子Larryの死を信じない母Kateの生き方は、絶えず幻想を追っかけ生きていかざるを得ない人間の姿を象徴している。

作者MillerはこのAll My Sonsを単に悲劇にとどめていない。最後の場面で、母Kateと息子Chris Kellerが抱き合う姿は、それでもなお明日に向かって生きていこうとする、生きていかざるを得ない人間の姿なのである。それは自己のうちに「社会」を取入れ、家族あるいは社会全体の「生」となった人間の姿である。2人の姿は、「怒りのぶどう」のローザンが、追われ逃げた1軒の納屋で、飢え死にしそうになっている見ず知らずの浮浪労働者を抱き、乳のはった乳房をふくませたときの、あの微笑みの姿であろう。